

書籍発刊 「大工道具・砥石と研ぎの技法」

「砥取家」4代目・土橋要造さん

愛宕山から東本梅町の範囲でしか採掘できない高級ブランドの砥石を採掘する唯一の事業主、土橋要造さん(61)。明治10年創業の「砥取家」として、需要に陰りが見えなくなり、4代目だ。昨年12月28日、誠文堂新光社から発行された「大工道具・砥石と研ぎの技法」日本の伝統を守り続けて土橋さんの仕事を紹介している。

電気工具が発達する昭和40年頃までは、丹波山尾山で採掘される砥石は、「合砥石(あわせど)」と呼ばれ、全国各地で採掘される荒砥石・中砥石と違い、丹波山地のみで採掘される仕上砥石だ。人造砥石では代用できず、刀や宮大工を研ぐ最後の天然の砥石は、使用目的別で「荒砥」「中砥」「仕上砥」に分けられる。丸尾山で採掘される砥石は「合砥石(あわせど)」と呼ばれ、全国各地で採掘される荒砥石・中砥石と違い、丹波山地のみで採掘される仕上砥石だ。人造砥石では代用できず、刀や宮大工を研ぐ最後の



発行された書籍を手にする土橋要造さん

仕上げに欠かせないものである。

私の砥石でないと研げない物がある

本は砥取家を中心に構成され、大工、刃物、工務店など各界の第一線で活躍する人たちの目線で語り、160ページに渡って砥石と研ぎの魅力を伝えている。歴史や研ぎ方法も紹介され、「これ以上に詳しい本はないのではないか」と土橋さんも一押しの一冊となった。

私の砥石でないと研げない物がある。日本の伝統を支える砥石として需要に応え続け、亀岡の市民にも砥石の魅力を発信していきたい」と話していた。

砥石は対面販売が基本。大工や料理人などが、愛用の刃物に合う砥石を求め、砥取家を訪れる。海外から買い求めに来る人も少なくない。

昨年9月、土橋さんのもとに取材依頼が入った。カメラマンが丸尾山を訪れ、採掘作業や砥石を撮影。10月に、編集の担当者、記者、カメラマンが現地を訪れて2回目の取材を行った。

そうして出来上がった

砥石を掘り今年で35年目の土橋さんは、営業やイベントでの展示、研ぎ体験の受け入れなど全て1人で手がけ、各地を飛び回る。「時代の変化で砥石の需要が減っているが、